

# 「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話を紹介しています。



白木 祐一さん  
昭和19年11月1日生まれ  
十勝川温泉地区在住

## 米農家に生まれて

**私**

は昭和19年11月に米農家の長男として生まれました。全てが手作業の時代で、田植えの時期には「でめんさん(※)」に来てもらい、私も学校を休んで苗を配る仕事を手伝いました。田んぼの雑草がひどく秋の稲刈り間際まで草取りに追われていました。米作りの北限地帯と言われた十勝で米農家を続けて、現在は十勝の地酒「十勝晴れ」の原料である酒米を栽培し、来年で10年の節目を迎えます。

※でめんさん：日雇い労働者

## 学生時代の楽しみ

**小**

学校時代は、「パッチ」や自転車のチューブを抜いたもので「輪回し」を作っ

て遊んでいました。運動会は、家族や地域がごぞつて参加する形式だったので、親も必死に練習していたのを覚えていません。地域対抗でしたから、みんな相当に力が入っていました。友達や先輩と帯広まで映画を観に行くのも楽しみでした。当時は百円あればバスに乗って映画館に行けたのですが、なかなか親がお金を出してくれませんでした。社会全体が高度経済成長前の大変苦しい時代だったのだと思います。

## 里親への登録

**私**

たち夫婦が里親制度へ登録するきっかけは、昭和60年に発生したトイレの前やロッカーに新生児が捨てられたという事件をテレビで見たことでした。子どもがいなかった私たちは、こういう子どもたちを育てられないかという思いから、児童相談所へ連絡をして登録の申請をしました。当時は、家庭や財産の調査もあつて、申請から1年半ほどかかって認定となりました。我が家に初めての里子が来りました。4歳と9カ月のきょう

だいでした。地域内では、白木さんの家に子どもが来たという事で、布おむつや子ども服などを持つてきてくれて、とても嬉しかったですね。これが里親の始まりで、現在まで20人を超す里子を育てています。

## 里子がもたらした

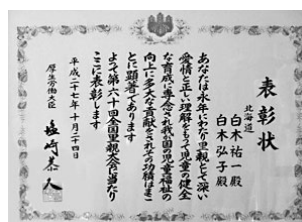
くれたもの

**里**

子たちの中には、家庭の事情や入院した親が退院するまでの間、だったり虐待を受けた子もいました。お互い血のつながりはなくても同居を続けていくと一番年上のお姉ちゃんが小さな子のおむつを取り換えてあげたり、学校でトラブルがあつたときには助けに行つたりと本当のきょうだいのようになつていく姿に感心させられました。

今までに苦労したこともありましたが、子どもたちとは真剣に本気でぶつかつてきました。これは一般の家庭でも同じことですので、何も特別なことだとは思っていません。社会人として巣立った里子たちが私のスーツを仕立ててくれたり、妻の還暦祝いに道

内の温泉ホテルに招待してくれたこともあつて、本当にありがたく幸せなことです。今後も厚生労働大臣からいただいた表彰状を励みに妻と一緒に頑張ります。



▲厚生労働大臣からの表彰状

## 音更町への期待

**十**

勝全体に言えることですが、人口が減つてきているので工場などを誘致して働ける場所を増やし、若い人たちが定住できるようになつて欲しいです。また、十勝の特産品などを十勝川温泉周辺で販売するなど多くの人でにぎわう観光地になつてくれることを期待します。

今回、白木さんの長年にわたる経験をお聞きし、里親制度の大切さについて学ぶことができました。(広報広聴課)